The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

思考スキルが転移する条件
－文学作品を解釈する思考スキルの成果と限界－

キィワード：　学習方略　　メタ認知　　読み　　スキル

上越教育大学 学校教育実践研究センター　佐藤佐敏

1　なぜ「読みの方略の転移」を問題とするのか

平成 20 年度に提出された学習指導要領改訂案では、「活用」が一つのキーワードとなっている。「活用」とは「学習した既有知識を使って新たな問題に取り組むこと」であり、過去の学習を新たな場面に転移させることである。

鶴田清司(2008)は「知識の活用を促す授業のあり方」として、「知識を実際の多様な場面で活用することができるかということは学習の転移の問題にほかならない」[1]と述べ、明らかになりつつある転移の条件を列挙している。このように、学習の転移の研究は、今後、国語教育においても、益々重要になってくるものと推測される。

一方、認知心理学の分野では、学習の転移についてはデリケートに扱われてきた。「学習がほかの領域に転移することを示すデータが得られている一方、ある状況で学習した知識が異なる状況で使えないことを示すデータも数多く得られている。」[2]と言う。転移の問題については慎重にならざるをえず、学校現場を舞台として実験的に論証することの困難さも手伝って、明確な結論はでていない。

市川伸一（1993)は、「従来の学習心理学における転移の研究がほとんど、自然に生じる転移としての『偶発的転移』しか扱ってこなかった。(佐藤略）転移させることを意図して、積極的な方策をとったうえでの『意図的転移』はあまり扱われていない。」[3]と述べている。いわば、「ここで生徒が学習した内容は、いつかどこかで想起されて、活用されるだろう」といった曖昧かつ偶発的な転移を期待して、学習が組織されている。換言すれば、意図された文脈の中で計画的に「転移を期待した学習」を組織することはあまりないということである。

認知心理学の分野でさえ、「学習の転移を意図した教授方法」についての研究は進んでいない。

さて、筆者がここで学習の転移として扱うのは、「学習知識の転移」ではなく、「学習方略の転移」である。

例えば、小中学生の国語指導をしてきた教員たちはみな、学習方略の転移が起こっていることを経験的に実感している。文学の授業の最後に、「登場人物に手紙を書く」という方法で、感想をまとめさせたとする。すると、次の年の読書感想文において、教師が支援しなくとも、「○○、君は…だったね」と登場人物に手紙を書くように感想文を書く生徒はいる。これは「登場人物に語りかける口調で書く」という方略が転移していることにほかならない。筆者が学習の転移として問題とするのは、このような方略の転移である。

この論考では、国語の学習の中の「読みの方略の転移」について考察していく。

読みの方略は、読み手のそれまでの経験や文章の特徴といった状況に依存されるものであると考えられてきた。そのため、読みの方略について語られることはあっても、その転移について問題にされることは多くなかった。

山元隆春(994)は「読みの『方略』を獲得するということは、その子どもが一人の読者として自立していく上で、抜き差しならない大切な営みである」[4]と述べ、方略に関する諸研究において探究されている問題を焦点化し、整理している。

一つの実践結果を基に、この「読みの方略の転移」について一考察を加えることが本発表の目的である。

2　方略の転移に関する先行研究

学校教育は何のために行われるのか。言うまでもない。「学校教育の目標は、生徒が学校で学習したことを、家庭、職場、地域社会に転移することができるように支援することである。」[5]

したがって、どのように読むのかという「読みの方略」はある解釈の課題において偶発的に生徒に培われるのではなく、意図的な指導のもとに培われる必要がある。

ところが、巷の国語教室では、「登場人物は、この時、どんな心情だっただろうか。」「登場人物 A と B の人柄を対比してみよう」といった指示や発問が、

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

テキストの特徴に応じて繰り返されている。ここには、いずれ指導言がなくとも自力読みのできる学習者を育てるといった授業者の意図が見えない。国語教育はスパイラルに言語能力を発達させる教科であるので、似た課題が繰り返されるのは致し方ない側面はあるものの、テキストに依存した指示や発問の反復では偶発的な転移しか促されない。

では、「学習方略の転移」について、認知心理学の領域では、現在どのように把握されているのであろうか。佐藤純(1998)は、「ある課題を学習するために最も適した学習方略が存在するであろうことは、多くの教育心理学や認知心理学の研究結果によって示されている」[6]としながらも、その学習方略が活用されえていない状況に疑問をもち、その原因を調べている。そして、コスト感や方略に対する好みが影響していることを明らかにした。

また、学習方略の転移については次の見解もある。「従来は子どもに方略を訓練しても訓練直後だけにその方略を使って、すぐにそれを使わなくなるといわれていたのですが、六ヶ月たったあとでも子どもが自発的にこれらの方略を使用しているということは、このメタ認知の訓練によって、子どもの方略とメタ認知が再構築され修正されている証拠だといえます。」[7] このように、学習方略の転移については懐疑的な見解と、メタ認知の訓練によって転移は生ずるとする見解が混在している。

本研究は、岡本がパリンサーとブラウンの研究成果を引用し、「メタ認知を訓練することによって、認知活動の遂行が改善される」[8] と述べているとおり、「メタ認知に働きかけることで、学習方略は転移する」という視座に立つ。そして、「メタ認知に働きかけた指導を系統的に行うことで、読みの方略は転移し、自力読みのできる生徒を育てることができる」という仮説をもって、論考を進める。

3　読みの方略と思考スキル

「読みの方略」には、様々なものがある。

第一に、誰もが無意識のうちに行っている原理的な方略がある。「分からなくなったと気付いたら、わかる場所まで戻ってから読み返す」などである。

第二に、動作を伴う方略がある。「線を引きながら読む」「わからなくなったら声に出して読む」などである。

第三に、スキルとしてのそれである。輿水実のスキル学習がこれにあたる。「組み立てに気をつけて読む」といった方略である。

第四に、思考技能にかかわる方略である。たとえば、「もし…なら…」と仮定しながら読んだり、「たとえば……」と例を考えながら読んだりする読みである。

国語教育は、方略として思考操作を扱う言語論理教育である。国語教育を言語論理教育として位置付けている井上尚美(2007)は、「子どもは毎日、いろいろな問題状況に直面し、彼らなりに思考を働かせ、論理を使っている。言語論理教育は、それを自覚させ、自分の考えの筋道や方法が正しいかどうかを反省させ（メタ思考)、再構造化させる」[9]と述べている。筆者が、この研究で扱う「読みの方略」は、メタ思考をして「思考操作をしながら読む方略」を指している。

なお、筆者が扱う「読みの方略」の具体については、岩手大会で発表した[10]ので詳述を避けるが、ここで言う「思考操作」を「思考スキル」と名付け、「読みにおける思考スキルの転移」の問題について述べていく。

4　思考スキルの実践

筆者は、新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校において、文部科学省の研究開発指定を受けて「学習スキル」の研究を推進してきた。そして、学習スキルの中でも「思考スキル」に着目し、次の過程を経て系統的に授業を構想した。

第一段階……思考スキルを無意識に使わせる段階
第二段階……思考スキルをメタ認知させ、意識的に使わせる段階（スキルの文型を意識させ、その活用を図る段階）
第三段階……思考スキルのよさを実感させる段階
第四段階……日常的に思考スキルの活用を促したり、活用した生徒を賞賛したりする段階

日常的に活用を促す段階では、たとえば、『まき割り』（三省堂教科書２年　伊集院静著）の授業（１月実施）において、「少女の『黒い靴下』には、何が象徴されていますか。仮定スキルを活用して説明しなさい」といった授業を行った。

岩手大会と宇都宮大会[11]でも思考スキルの系統的指導の発表を行ったが、今回の実践は、これまでの実践と異なり、「スキルの時間」を特設して授業を行い、かつ日常的に第四段階を設けた[12]。

NII-Electronic Library Service

5　思考スキルの転移を図る調査

1）調査問題

H20/2/15　調査学級　附属新潟中１学年117人

次の短歌を読んで、後の問いに答えなさい。

石川啄木

何となく、
今年はよい事あるごとし。
元日の朝、晴れて風無し。
※あるごとし……あるような気がする。

問い　昨年の啄木は、どうであったと考えますか。
次から選び、記号に○をつけなさい。

ア　幸せであった　イ　幸せであったとは言えない
ウ　幸せでも不幸でもなかった
エ　幸せでもあり不幸でもあった

そのように考えたのはなぜですか？
根拠を明らかにして説明しなさい。

この問いにかかわる根拠を説得力のある文章で記述したかどうか。そして、その記述で仮定スキルを使っていたかどうかを調査した。なお、思考スキルの転移については、根拠を明らかにして説明する時に、次の文型を使っていたかどうかという観点で、仮定スキルの活用の有無を判断した。

①「もし（仮に）……ならば、…」
②「……ならば（たらば）（であれば）、……」
③「……だとすると、…」

仮定スキルを使った記述例は次のとおりである。

「もし、昨年幸せだったとしたら、『今年は』ではなく『今年も』となるはずです。『今年はよいことあるごとし』と書いてあるから、昨年は良いことがなかったのだと思います。」

2）　調査結果

次の二つの観点で、生徒の解釈を分類した。

・妥当性のある根拠を基に解釈を述べたかどうか。
・仮定スキルの文型を使っていたかどうか。

1　解釈が妥当であり，仮定スキルを用いた生徒
……　６９人　（６０％）
2　解釈が妥当であり，仮定スキルを用いなかった生徒
……　３０人　（２６％）
3　解釈が妥当でなく，仮定スキルを用いた生徒
……　４人　（３％）
4　解釈が妥当でなく，仮定スキルも用いなかった生徒
……　１４人　（１２％）

筆者は宇都宮大会においても、違う韻文の違う問いで調査を行ったが、今回の調査結果は、前回の結果と酷似した結果が得られた。２年連続の調査で、どちらも６０％の生徒が仮定スキルの文型で答えていた。

なお、この数値の高さについて、「問い自体が、仮定スキルの活用を促す構造になっているのではないか」という指摘があったため、同じ問題を他の学校でも実施してみた。実施したのは、学力的に大きな差違がないと推測される、他の大学附属中学校の２学年（１学級３９人）である。すると、その学校の結果は次のようになった。

H21/4/18　調査学級　A中２年１組　39人
○ 仮定スキルを用いた生徒……　７人（１８％）
○ 仮定スキルを用いなかった生徒　３２人（７２％）

仮定スキルを学習した生徒の６０％が「もし…なら」「…れば」「すると…」といった文型を活用していたのに比べ、他校では、わずか１８％の生徒しか、この文型を活用していなかった。

この結果から、「問い自体にスキルの活用を促す構造的な必然があった」とは言い難い。したがって、附属新潟中学校の半数以上の生徒が仮定スキルを活用したのは、事前に仮定スキルを学習していた成果であると推定できる。

この結果から「読みにおける方略の一つ、仮定スキルは、系統的に指導することで、他の解釈の場面に転移する可能性が高い」といえる。

また、この調査のほか、仮定スキルの活用について、「他の場面で活用したことがあるかどうか」を尋ねたアンケートを行った。そして、「『活用した』という人は、どんな場面で活用したか」を記述させた。すると、次のような回答が寄せられた。

理科の学習の時に、「もしこのＡが砂糖だとしたら、これは熱するとこげるだろう」というように仮定してから実験をしました。

このように、７人の生徒が、他教科でも仮定スキルを使って推論をしたと記述した。これらの記述から、メタ認知能力の高い一部の生徒は、質の異なる問題解決の場面でも思考スキルを活用しようとしていることが示唆される。

6　思考スキルが転移する条件

「学習課題と転移課題の内容に重複があれば、転移は生じやすい」[13] と言われている。仮定スキルの

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

学習において、「三太郎は成長したと言えますか。言えませんか。(三省堂教科書1年『竜』今江祥智著)」といった課題も行ったので、調査課題が類似しているとは言える。「一般に転移は、二つの領域の間の類似性が高く、顕著であるほど生じやすい」[14] ので、この文脈に沿うと思考スキルは妥当な転移を生じさせたと判断できる。

しかし、類似性の高い課題が転移を生じさせたからといって、この実践結果が意味をもたないというわけではない。このような転移が生じるのであれば、その転移を意図して、思考スキルを扱う意味はある。読みの方略の転移を意図して授業を構想することは、生徒の自力読みを育てる上で有効である。

宇都宮大会で発表した実践と合わせて、思考スキルが転移する条件を整理すると、次のようになる。

1) 似た読みの課題に対しては多くの生徒に転移が生じやすい。

2) 無意識のうちに用いていた思考スキルを意識化させ、メタ認知させて活用を図ると、他の場面への転移を生じやすい。

「転移はメタ認知能力を高めることによっても促進される」[15] という見解を援用すれば、この条件は、妥当である。

3) 思考スキルを活用することのよさや意義を実感している生徒ほど、その転移が生じやすい。

これも、方略使用を促進する要因として、村山航(2003)が「重要になってくるのは、方略に対する有効性の認知である」[16] と述べていることと合致している。

このように、「課題の類似性」「メタ認知への働きかけ」「方略に対する有効性の認知」の3点が、思考スキルが転移する条件として確認された。なお、これらの転移の条件は、今までの認知心理学の研究成果とも一致している。

ところで、筆者は、仮定スキルのほかに、思考スキルとして、対比スキル、帰納スキルなども扱ってきた。しかしながら、これらのスキルは、仮定スキルほど、他の読みの場面で活用されることはなかった。仮定スキルは「既有知識と新たな情報」を橋渡しするメタ思考であるため、新たな文章と出会った時に、その活用が図られやすい。仮定スキルは、テキストの特徴にかかわりなく、様々な読みの場面で活用しやすい思考技能であると言える。

それに比べて他のスキルは、読む目的やテキストの特徴といった、読む行為の状況に大きく左右される。松本修(2006) は「読みの方略は読者によって異なる。読みの方略自体も状況の一つとして働く」[17] と述べているが、ここに読みの方略の転移を評価し、研究する限界性が見え隠れしている。

＜引用文献＞

1 鶴田清司 2008 「知識の活用を促す授業のあり方 ―『転移』に関する研究をもとに―」『授業研究21』 No.618 明治図書 p.13

2 伊藤裕司 2003 「新しい学習研究の理解」 子安増生編著 『教育心理学＜新版＞』有斐閣出版 p.126

3 市川伸一 1993 『学習を支える認知カウンセリング』 ブレーン出版 p.53

4 山元隆春 1994 「読みの『方略』に関する基礎論の検討」広島大学学校教育学部紀要，第Ⅰ部，第16巻 p.29

5 米国学術研究推進会議編 吉岡敦子訳 2002 「転移―学んだことを活用するために」森敏昭監訳『授業を変える』 北大路出版 p.72

6 佐藤純 1998 「学習方略の有効性の認知・コストの認知・好みが学習方略の使用に及ぼす影響」教育心理学研究，46，p.367

7 岡本真彦 2001 「メタ認知」森敏昭編著 『おもしろ思考のラボラトリー』北大路書房 p.155

8 7に同じ p.154

9 井上尚美 2007『思考力育成への方略＜増補新版＞』明治図書 p.63

10 佐藤佐敏 2006「文学作品を解釈する思考スキル」『全国大学国語教育学会第 110 回大会研究発表要旨集』 pp.157-160

11 佐藤佐敏 2007「思考スキルが転移する可能性 」『全国大学国語教育学会第 112 回大会研究発表要旨集』 pp.119-122

12 新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校 2008『平成 19 年度 研究開発実施報告書 第一年次』p.72

13 5に同じ p.63

14 3に同じ p.126

15 5に同じ p.65

16 村山航 2003 「学習方略の使用と短期的・長期的な有効性の認知との関係」教育心理学研究，51，p.130

17 松本修 2006『文学の読みと交流のナラトロジー』東洋館出版社 p.69

NII-Electronic Library Service